侵略者あるいは鬼の末裔として(6)

――日本人は中国・朝鮮で何をしたのか＜その 5＞――

小泉雅英

前回の「三光作戦」には、その暴力性の徹底として、「無人区」化があった。日本の軍隊(皇軍)は、各地で「殺しつくし、奪いつくし、焼きつくす」という残虐行為の果てに、「無人区」化作戦を展開した。今回は、その実態を確認する。主に日本と中国、二人の歴史研究者による『もうひとつの三光作戦』(姫田正義・陳平共著)に依拠し、同書からの引用は頁数のみを記す(*1)。

■「無人区」化とは何か

「三光作戦」には、その最も計画的・体系的な残虐行為、一定地域を封鎖する「遮断壕」や、「無人地帯」の設定(「無人区」化)があった。それは「万里の長城線の南北の土地から中国人を完全に追い出し、この長大な地域を「無人区」にする」(p.7)ものであり、「この地域の抗日運動を根底から抹殺し、「満州国の西南国境線」の安全を確保するとともに、あわせて北京(当時、北平と呼ばれていた)周辺の防衛をも確保し、華北一帯を南へ南へと伸びていった日本軍の戦線の大後方基地、さらには対ソ戦の後方基地にしようとした」(p.7)のであった。「この計画の中でとくに方面軍が重視したのは、未治安地区と准治安地区の間に遮断線を構成して、未治安地区を封鎖し、その衰亡をはかるとともに、准治安地区への共産軍の侵入を防護しようとする計画であった」(*2)。

残虐な「燼滅」戦術そのものは、それまでにも、「1910 年の韓国併合にいたる間の、朝鮮民族の独立擁護闘争である義兵運動の鎮圧に用いた方法」(*3)や、「1930 年代に「満州国」を作り上げた後も、抗日ゲリラ、とくに共産系の東北抗日聯軍の活動を封殺するために、東部山岳地帯で山間部落を焼き払い、集団部落の建設という方法を踏襲した実績がある」(*4)。しかし華北に「日本軍が展開した燼滅掃蕩作戦は、その規模の大きさと残虐さで群を抜いていたのである」(*5)。「華北地域の日本軍の「無人区」設置の方法は、満州の日本軍のように集家併村をおこなうのではなくて、狂暴に放火、殺人、掠奪をおこない、民衆を追い出して「絶滅地帯」をつくるというやり方」(pp.131-132)であった。

「無人区」が設置された 25 県すべてを実地調査した陳平氏は、「日本の侵略者は全国各地に多くの「無人区」を設置したが、長城線上のこの「無人区」は環境の苛酷さ、闘争の激しさ、戦略上の重要性のすべてにおいてとくにきわだっている」(p.115)と記している。陳氏自身の故郷、魯家峪(*6)もまた「無人区」化され、困難を強いられる中で八路軍に身を投じ、抗日闘争を生き抜いた後、研究者となったのだった。

このように「無人区」とは、「東は山海関にはじまり西北方に伸びて河北省北部の独石口にいたる約千キロもの長城線沿いに、日本軍が中国人を強制追放し居住を禁じた「無住地帯」、さらに耕作をも禁じた「無住禁作地帯」のことである」(pp.7-8)。その過程で、「先祖伝来の土地を追放された中国人は、多くの場合、日本軍が設置した「集団部落」(「集家併村」とか「集家部落」ともいった)に

居住させられ、軍と警察の厳しい監視・管理のもとに農業生産だけは引き続きおこなわせられた」(p.8)のだった。その始まりは、抗日闘争が深化発展し、「平北と冀東の勢力が熱南、熱西両面から進撃してくる事態に直面して、(略)1941 年 9 月、日本関東軍西南防衛司令部は「西南地区粛正工作実施要綱」を作成し、承徳の日本憲兵隊本部も「国境地帯無人化〔集家工作〕ニ伴フ民心安定」という方案を定め、全面的な「無人区」設置計画を作成した」(p.122)ことである。その後、華北でも、「1942 年 8 月上旬に開かれた「日本軍・北支那方面軍兵団長会議において、北支那方面軍総司令官・岡村寧次がみずから画策し、配置した」(p.130)。さらに「長城線上の抗日ゲリラ根拠地を徹底的に破壊し、あわせて華北と東北地区の連繋を断ち切るため、(略)長さ約 600 キロメートル、幅約 8〜10 キロメートル(略)に封鎖線をひき、断続的に遮断壕を掘って、この区域を「非治安地区」と宣言した」(p.131)のだった。

以上、要するに「無人区」化政策とは、「個々の「殺しつくし、奪いつくし、焼きつくす」という三光作戦による諸事例の、個別性、偶発性を超越して地域的・空間的な広がり、時間的継続性を当初から計画的に追求したところの、もう一つの三光作戦」(p.10)だった。陳平の引く「初歩的な統計によれば、「無人区」の総面積は約 5 万平方キロメートル、そのうち「無住禁作地帯」が全部で約 8500 平方キロメートル、集家された自然村は1万 7000 あまり、建設された「人囲い」が全部で 2506 か所(他に(略)100 あまりの、囲いをつくらなかった集家地点があるが、計算に入れていない)、追いたてられて集家併村された民衆は約 140 万人である」(p.148)という。

■「無人区」化の実態

「無人区」は、どのように形成されたのか。北支那方面軍参謀部の『経済封鎖月報』(1942 年 8 月)によれば、「各兵団により封鎖地帯を設定し之に対し封鎖壕を掘開す。(略)河川等の自然物を以て封鎖線を形成しえられざる場合は、幅 6 米、深さ 4 米を基準とする封鎖壕を構築し、堀開不能の地にありては遮断壁を一連に構築し、車馬は勿論人の交通に出入口以外は遮断す。(略)山西地方五台附近にては、封鎖線外に無住地帯を設定して封鎖を強化しあり」(*7)と記されている。例えば、第百十師団は「東の平地方面、西の山地方面、京漢線の両側の、合計 4 本の遮断壕を、南北 200 キロメートル 以上の地域」に掘った」(同前)が、「この遮断壕の工事が、膨大な強制労働を民衆に強いることになり、武力による無住地帯の設定と相まって、「三光政策」と呼ばれた」(同前)のだった。

第二七師団の行った「冀東1号終期(後期)作戦」(1941 年 9 月〜11 月)について、支那駐屯歩兵第1連隊の記録によると、「遵化、豊潤、遷安を結ぶ三角地帯は、冀東道の中央の山岳で、八路軍冀東軍区の根拠地であるので、これを取り囲むように 200 キロメートルの遮断壕を作り、さらに「満州国」の熱河省方面からの八路軍の侵入を防ぐ目的で、長城の内側に幅 4 キロメートル、長さ 100 キロメートルの無人地帯を、2 ヵ月の間に設定したというのである。(略)満州国」との出入りを遮断するため、長城線内側に馬蘭峪(遵化西方約 30 キロ)から建昌営(遷安北方約 20 キロ)付近まで、幅約 4 キロの帯状地帯を無住として所在部落を移動させた。その長さは約百キロに及んだ」(*8)という。

また、冀中軍区の遊撃地区である寧普、隆平の両県との県境に遮断壕を構築した記録では、「県境沿いに、図上でおよそ 20 キロメートルの線上に、6 個の堡塁(望楼)と遮断壕を構築した。期間は 41 年 7 月 19 日より 9 月 23 日までの 2 ヵ月間であった。「構築要領」としては、「苦力差出監督」として「各村一戸一人ノ割ヲ以テ苦力ヲ差出サシメ之ガ督促ノタメ県警二十名ハ五組ニ分シ工事開始前日ヨリ各村落ヲ巡回セリ」(略)。そして「使用苦力数」は、約八万七千名としている。大隊はこの 2 か月間、「(略)新民会ノ宣伝工作、新民分会ノ新設、県知事ノ巡回工作等ヲ七月上旬ヨリ連続(毎日)実施セリ」と報じている。日本軍の監督の下に、中国側(傀儡政権側)武装団体を使って、民衆を動員した」(*9)のだった。

船生退助(第九独立守備隊歩兵第十七大隊第一中隊)は、「1940 年 5 月の作戦開始以来 44 年まで、熱河省と河北省の境である万里の長城付近の一部を担当していましたが、42 年 1 月から同年 12 月、河北省白馬関付近での無住地帯・無人区化政策と集家併村工作が私たちの任務で、(略)その指定区域に住んでいた人は、行政の指定した期間内に指定された場所に引越ししなければならない。それが布告されると警察が、「○月△日以降これより以南に立ち入る者は逮捕するか射殺する」という立札を立てました。(略)私たち中隊は毎日のように長城線の南北に走る無数の谷間を山の上から観察し、まだ取り残されている家があれば焼き払い、地下や穴室に隠してある鍋釜を探し出しては容赦なくぶち壊し、人がいれば捕まえ、逃げれば鉄砲で撃つ。畑に農作物が生えていると鎌で根元から薙ぎ倒しました」と証言している(*10)。

「集家併村が開始されたばかりのころは、期限を区切って家屋を破壊し移動させていたが、のちになると、武力で人々を追いたて、拒む者は捕らえ、逃げる者は殺すようになった。いわゆる「無住禁作地帯」を画定してからは、根拠地の民衆を見つけしだい殺すようになった。(略)まるで獲物でも追うように中国人を追いかけまわしては殺した。殺したのち、耳を切り取り、針金に突きとおして持ち帰り、数に応じて論功行賞をおこなった」と陳平は記している(p.151)。

華北のほぼ中央に位置する興隆県は、長城をはさんで冀東各県と連なる熱河省の要衝の地。「「無人区」設置の重点地区であり、(略)「無住禁作地帯」は 1200 平方キロメートルに達し、全県総面積の半分を占める。当時の人口は約 14 万人で、11 万人が追われて集家併村をうけた」(pp.153-154)。「一般の集家併村地区は、「無住地帯」に区画してから、民衆に家屋を徹底的に破壊させて、「人囲い」に移るように強制し、また「無住禁作地帯」では火をつけて家屋をすべて焼き尽くした。「無人区」に区画されたのは合計で1万7000 自然村で(略)とくに山岳区根拠地の村はすべて日本軍に何度となく焼かれ、五指山根拠地の(略)一帯はくり返し 18 回も焼かれた。(略)民衆が隠れるのに利用する山林を破壊するため、日本軍は毎年春と冬の「掃討」のさい、いたるところで火を放ち山林を焼き払った。当時の熱河地帯は土地は広く、人口は少なく、多くの原始林があった。とくに熱南一帯は、清朝が馬蘭峪に東陵を建設してからのち、霧霊山から南は長城線にいたる地区の、ほぼ全興隆県数百華里四方を含む範囲を「後陵風水の地」とし、住民を移動させ、兵を駐屯させて守り、森林をつくった。(略)清朝滅亡後、「後陵風水の地」は解禁されて、数百年間かけてつくられてきた森林は、軍閥、官僚たちの伐採、破壊にあったが、依然としてなお広大な森林が残されていた。しかし「無人区」設置による狂暴な破壊を経て、森林は焼き尽くされてしまい

(略)青々とした壮麗な河川も一片の焦土と化してしまったのである」(pp.154-155)。

■「集団部落」=「人囲い」〔人圏〕の実態

「「無人区」設置の目的は集家併村の措置を通じて民衆を統制し、「帰順」させ、さらに「民心をかちとる」ことであった。(略)ところが実際は、集家が完成すると、民衆は「人囲い」に押しこめられ、他にくらべようのない残酷な目にあったのである。「人囲い」〔人圏〕とは民衆の憤りを現した言い方である。豚には豚小屋〔豚圏〕があり、羊には羊小屋〔羊圏〕があるように、日本統治下の中国人も囲いに入れられ豚や犬にも及ばぬ生活をさせられたという意味である。それで通常「人囲い」と呼ぶが、実際の正式名称は「集団部落」といった」(pp.157-158)。

「「人囲い」の建物の形は監獄と同じで、四方は一丈五尺〔4・8 メートル(略)〕ほどの高い塀であり、塀の上には鉄条網が張られるか、刺のある枝がいっぱいにさしてあった。塀の上には銃眼用のくぼみがあって、内側には「馬道」(見張りの兵の通る道)があった。数十メートル置きに見張り台が設けられ、塀の四隅と大門の上にはトーチカが築かれた。これらは、傀儡軍か武装警察によって守られていた。普通、各「人囲い」には一つか二つの大門しかなく、(略)昼間、日の高いうちは、確実に「平穏無事」であることを見とどけてから、やっと門を開けて人々を耕作に出し、日暮れ時は日がまだ没しないうちから警戒が始まる。少しでも変わったことがあるようだと、数日は大門を開けない。しかし逆に「人囲い」のなかの一般の家は必ず「門戸開放」しなければならず、「夜は戸締りをしない」ことが強制され、日本や傀儡の軍・警察・特務連中がやりたい放題に強姦、略奪できるようになっていた」(pp.159-160)のだ。

「多くの人たちは「人囲い」に押しこめられてから日本の降伏までの何年間ものあいだ、ボロ小屋に住んでいたのである。冬は辺境の吹雪が襲い、部屋のなかを雪が吹き荒れ、寒さは骨の髄までしみ通り、多くの人たちが飢え、凍えて死んだ。(略)夏になると、部屋のなかも街のなかもぬかるみ、汚水、糞便でいっぱいになった。臭気は天までたちこめ、蠅、蚊、南京虫、虱、ゴキブリなどが動きまわっていた。そのため、ペスト、腸チフス、コレラ、リージ(伝染性の下痢)、マラリア等の伝染病があまねく流行した」(pp.160-161)。「人囲い」のなかでは、満州国の「組合配給制」が実施された。一切の収穫物は上納しなければならず、これを「出荷」と呼んだ。(略)たとえば 900 人足らずの豊寧県五家営子部落では、食糧のほとんどが徴収されたほかに、毎年 30 万元の積立金、20 万元の戸籍費、豚 800 匹、羊 300 匹、牛 400 頭、1 年間で 219 日の家畜の徴用、年間 6 カ月あまり延べ 500 人の無償労働が課せられていた」(pp.160-161)という。

「民衆の衣服の問題はさらに深刻であった。(略)一家に 1 本のズボンがあれば、男がはいて外出し、女は裸でいた。部屋のなかに身を隠す穴を掘り、人が来ればそこにもぐりこんで、鍋ぶたで蓋をして隠れるようにして過ごしていたのである」(p.165)。さらに驚くべきことに、「日本の侵入後、熱河はアヘン生産の重要基地の一つとなり、栽培面積が矢継ぎ早に拡大され(略)少しでも良い土地はほとんどすべてに、ひどい時には住宅のわきや庭の内にさえすべてアヘンが植えられた。(略)「アヘン出荷」が不足すれば、生活用品を配給されないばかりか、不当な刑罰、拷問をうけ、ひどい時には投獄されるか、強制労働を課せられたのである。集家併村の実行後、土地の大部分が荒れ

果て、民衆はロすぎをする食糧さえ栽培するのがむずかしくなったが、アヘンは依然として広い面積で栽培するように強制されていた」(pp.167-168)のだった。

「このような三光作戦は、総延長 1 万 1860 キロに達したといわれる遮断壕・封鎖線などによる封鎖作戦や治安工作・清郷工作とあいまって、中国共産軍・抗日根拠地に少なからぬ打撃をあたえた」(*11)と言われるが、「家を焼き、人を殺し、毒を撒いても、日本軍が引き揚げてしまえば根拠地は再建される。しかも 43 年以降は、治安地区は減少し、未治安地区は増加の一途をたどる」(*12)のだった。つまり、この作戦は失敗に帰したのだ。しかし、「これにともなう遮断壕の構築や無住地帯の設定によって華北の民衆の蒙った被害ははかり知れない」(*13)。人命だけでも、「華北全体の被害は将兵の戦死者を除いて「247 万人以上」」(*14)と言われる。「この中には強制連行された人びとのその後の運命はカウントされていない」(同前)。

以上、「無人区」化の実態を確認した。これはもちろん、氷山の一角に過ぎない。全て私たちの父や祖父たちが行った罪業である。すでに 80 年余の時間が経ち、遠い歴史の彼方に消え去ったのだろうか。しかし、日本軍(皇軍)の暴力に曝され、家族などが殺された人びとにとっては、決して忘れることのできない所業であろう。(了)

＜注＞

*1)本書には、キムチョンミ(金靜美)による次の批判がある。「厳密な意味では中国人研究者との共同研究とはいいがたい(略)。共同研究というならば、すくなくとも日本で「資料の公開」を実現させるためになにほどかのことをおこない、「中国側」に提供しなければならないのではないか。(略)姫田は、この論文で 1945 年 8 月に、日本人 68 人が殺された事実と、「無人区」策動で数知れぬ中国人が日本正規軍によって殺害されたことの歴史的比重を同一視している」(『中国東北部における抗日朝鮮・中国民衆史序説』p.412)。しかし残念ながら、30 余年後の今も、「無人区」についての包括的研究書は、本書以外に見当たらない。

*2 藤原 彰『天皇の軍隊と日中戦争』p.104

*3 同上書 p.95

*4 同前。この点は、キムチョンミ前掲書(pp.301-420)に詳しい。

*5 藤原同上書 p.95

*6)魯家峪は、万里の長城線が走る燕山山脈南麓に広がる遵化県の南端。かつて本多勝一が訪れ、「三光政策の村」(『中国の旅』最終章)で取材した豊潤県の潘家峪にもほど遠くない。6 つの自然村から成り、1941 年 2 月中旬から翌 42 年まで、3 回にわたる大掃討の中で、家屋が焼かれ、村民が殺された。魯家峪惨案と呼ばれる。

*7) 藤原前掲書 p.107

*8) 同上書 pp.109-110。ちなみに、江戸城の内郭は、周囲約 2 里(7.85km)、外郭が約 4 里(15.7km)。深さは約 2 間(3.6m)が多く、最深で 3 間(5.5m)と言われる。ランナーに人気の皇居一周コースは、約 5km。ここで示された「幅 6 米、深さ 4 米、長さ 200 キロメートル」の遮断壕の掘削とは、どれほどの巨大工事か、想像を絶する。

*9) 同上書 p.111
*10) 船生退助「無住地帯と拷問・虐殺」(『世界』1997 年7月号 p.109)
*11)江口圭一「中国戦線の日本軍」p.68
*12) 藤原前掲書 p.126
*13) 同上書 p.123
*14) 姫田光義『「三光作戦」とは何だったか』p.43

引用・参考文献

・本多勝一『中国の旅』(朝日文庫 1981 年)
・江口圭一「中国戦線の日本軍」(藤原彰・今井清一編『十五年戦争史 2』、青木書店 1988 年)
・姫田光義・陳平(訳:丸太孝志)『もうひとつの三光作戦』(青木書店 1989 年)
・本多勝一・長沼節夫『天皇の軍隊』(朝日文庫 1991 年)
・キムチョンミ(金静美)『中国東北部における抗日朝鮮・中国民衆史序説』(現代企画室 1992 年)
・姫田光義『「三光作戦」とは何だったかー中国人の見た日本の戦争』(岩波ブックレット 1995 年)
・桑島節郎『華北戦記　中国にあったほんとうの戦争』(朝日文庫 1997 年)
・戦争犠牲者を心に刻む会編『アジアの声・第 12 集 中国侵略の空白 三光作戦と細菌戦』(東方出版 1999 年)
・藤原 彰『天皇の軍隊と日中戦争』(大月書店 2006 年)
・雑誌『世界』1997 年 7 月号「特集＜七・七＞盧溝橋事件 60 年」(岩波書店)
・雑誌『世界』1998 年 5 月号「特集＜侵略の証言＞」(岩波書店)